① 毎月1回25日発行　　第3種郵便物認可(昭和35年7月26日)

山と博物館

第9巻 第9号　1964年9月25日　大町山岳博物館

長期的な黒四観光をのぞむ

黒四ダムは開放してから二ケ月、予想どおり、県内外の観光客で賑わった。

しかし、扇沢の集団施設や、関連諸施設ができないばかりに、お客様に迷惑をかけたり、失望させたりしたようだ。

もともと観光事業は独立して成立つものではなく、他の観光地との結びつきや他業者、機関との協調、関連諸施設の必要であることはいうまでもないが、黒部の場合それが欠けているような気がしてならない。

黒部の秘境は日本人全体の宝であり、その優れた景観を観ることは、ひとり観光業者の願いであるばかりではなく、すべての人の願いでもあると思うのだが、機関や企業はその立場を主張し、営利の追及のみにはしって、観光のもとである自然の保護や復活をおこたるならば、美しい自然は数年を経ずして、荒廃するであろう。そしてこと志と反して、黒部は観光客から見向もされなくなるし又、日本人全体にとっても大変な損失だと思う

山博は、針の木自然園や扇沢分館を自然教育と保護の目的で構想したが、このことを素直に理解し協力していただけるならば、事業費はでる筈だし、又永い目でみて事業者の損にはならないと思う。

ライチョウやカモシカが自由に観察できる針ノ木、自然が保存された黒部実現のために観光業者や関係機関はいますぐにでも話しあって、まとまった計画をもちたいものだ。

（藤巻厚美）

「なんじゃもんじゃ」

山崎林治

「なんじゃもんじゃ」という名は、その言葉のひびきが面白いためか、多くの人に知られているようである。全く植物などに無関心だと思われるような人からさえも「なんじゃもんじゃ」という木はどんな木かと問われることがしばしばある。

「なんじゃもんじゃ」という名の元祖は、千葉県香取郡の神崎町にある神崎神社境内の巨木についたものだという。この木は古書にも絵が出ているし、それは「樟木也」とも記されている。近くは伊藤篤太郎氏が、これはクスノキ科の「クスノキ」であることを確めている。また香取神社の「なんじゃもんじゃ」もクスノキであることもわかっているし、群馬県の新田剛の「なんじゃもんじゃ」はクスノキの別名であるかのように言った人もあったが必ずしもそうはいいきれない。クスノキは誰も知る、暖地の植物であるから、九州あたりでは相当の大木がいくらも見られるが関東地方では、稀にしか見られない植物である。東京の明治神宮外苑に、もと「六道木」といわれた木があった。これは青山六道の辻にあったので、こう言われたものであろうがそののち誰いうともなく「あんにゃもんにゃ」の木と呼ばれるようになった。「あんにゃもんにゃ」というのは「なんじゃもんじゃ」と全く同意語で、その木の正体がよくわからない珍らしいものということのようである。のちにその木は、モクセイ科のヒトツバタゴであることがわかった。ヒトツバタゴという木は、分布が非常にせまい植物で、その自生地は、愛知・岐阜・木曽川添の他に対馬位のもので、他の地方には殆んど見られない。勿論東京では珍しいものの一つである。

なんじゃもんじゃ（フジキ相）の一部分

この名は「一つ葉たご」という意味で「たご」というのはトネリコの別名である。トネリコは複葉であるのに、これは単葉だから「一つ葉」とつけたのだという。落葉の高木で雌雄異株、葉は革質で対生して、花房の様子がトネリコに似ているのである。このほか、保谷の「なんじゃもんじゃ」はニシキギ科の「マユミ」であることもわかっている。

なお、小石川植物園には「なんじゃもどき」という木がある。これはヤブニッケイの一変種で「ウスバニッケイ」という植物であるニッケイは中国からの渡来植物で日本に自生はない筈であるがヤブニッケイは、本州南部から四国・九州・琉球などに自生するもので東京では勿論珍らしい。その上ウスバという変形であるから一尽珍らしいものとされているわけである。

また、小田原の飛乱地という所にも、「なんじゃもんじゃ」といわれる名木がある。これはイバラ科の「バクチノキ」という植物で一名「びらんじゅ」ともいって、ここの地名と何か深い関係があるもののようである。サクラにごく近縁であるが、常緑で、秋に小さい白い花が咲いて、翌年の5〜6月頃に実が熟すという。ちよっと変ったものである。幹が古くなると、コルク層が自然にはげて落ちる様子がサルスベリやヒメシャラの幹に似ている。バクチ打チが敗けて次々と着物をぬぐようだというので、この名がつけられたという。暖地性のもので、関東地方にはごく稀。まず珍品の一つということにもなろう。

筑波山にも「なんじゃもんじゃ」がある。これはクスノキ科の「アブラチャン」であるというし、三島の「なんじゃもんじゃ」はカツラ科の「カツラ」であり、山梨県の鶯宿峠のものは「リョウメンヒノキ」（ヒノキ科）というものだという。リョウメンヒノキというのはよくわからないが、多分コノテガシワのことではなかろうか。もしそうだとすると自生地がわからないままに日本に渡来し社寺・公園などによく植えられているものであるそれが野生状態で大きくなっているのではなかろうか。

茨城県にある、「なんじゃもんじゃ」はセンダン科の「チャンチン」であるという。チャンチンという名は、漢名の「香椿」から来たもののようで、中国の原産であるが、本県あたりでも今はよく見かける植物である。生長の早い木だから、恐らく、あまりみかけない木が見る間に大木になったというので、珍らしがってこんな呼び名でいうようになったのではなかろうか。これと同じ、チャンチンに「おどれの木」とか「なんじゃの木」という名で呼ばれるものが、山梨県の富士川添にあるが、これも同意のものである。

また、埼玉県では、松山の前弓神社の近くに「なんじゃもんじゃ」があって、これはイバラ科の「イヌザクラ」であるという。イヌザクラは本県などにもよく見られるものであるが、大木は少なく、北安美麻村大塩の大木が県の天然記念物に指定されている。その幹囲は目通り8、45mという巨木である。松山のものも恐らく大木で珍らしいと言うことであろう。もう一つ、飯能（はんのう）の「なんじゃもんじゃ」はもと「あおき」と土地の人は呼んでいたというが、実はクスノキ科の「カゴノキ」である。カゴノキは、コガノキともいって、暖地性の常緑の大高木で、古い

幹の樹皮は、円く点々とはげて、鹿の子模様ができるので、この名ができたわけであるがこの地方では、珍らしい植物というわけである。

神奈川県にも「なんじゃもんじゃ」がある神武寺のものがそれで、これはホルトノキ科の「ホルトノキ」だという。この木も常緑の高木で、むかし、この実からホルトガルの油すなわちオリーブ油がとれると誤認したことから名付けられたものであるが、別にモガシズクノキなどとも呼ばれ、暖地性のものである。したがって神奈川県では珍らしく、分布の北限だということである。更に大山のものは「タラヨウ」(モチノキ科)有馬のものはニレ科の「ハルニレ」であるという。タラヨウは常緑高木で、割に生長のおそい暖地の植物であるし、ハルニレは、落葉高木で、日本の北部に育ち、生長がにぶい。北海道の「エルム」がそれである。こゝのものは目通り幹囲6、80mというから、この種の植物としては相当な巨木で、しかもこの地方にこのような大木のあることは珍らしいということにちがいない。

(フジキ)小枝と葉、小葉が互生してる

この他、和歌山県の「ななしの木」は「タムシバ」(モクレン科)五島の「ななし木」は「ナタオレノキ」(モクセイ科)で「なんじゃもんじゃ」とはいっていない。タムシバは、本州西部から日本海側のもので、本県にも北西部には見られる。また、ナタオレノキは別名オオモクセイ、またはサツマモクセイといって本州では若狭湾に一個所あとは九州の西部にだけ見られる分布の狭い植物である。

このように「なんじゃもんじゃ」という名は特に、関東地方に多く、各地によって樹種がちがっていて、ある特定の植物を指している名でないことは明らかである。結局各地の珍木、名木、巨木などにつけた、関東地方におこった一種の方言にすぎない。

さて、本県では、これに類するものにどんなものがあるだろうか。

まず、長野市茂菅に「ななし木」というものがあるし、小県の本原には「ななし木」というものがあって、共に「なんじゃもんじゃ」と同意に解されている。その正体は、両方共ニレ科の「アキニレ」である。ハルニレは前述のように北方の植物で本県には、ちょいちょい見られるが、アキニレはむしろ暖地によく育つ植物であるため、本県には数少ない種類である。まず珍らしいものの一つといえよう。その上大木ともなれば、更に珍らしいことになろう。

次に、南佐久の大沢にある「なんじゃもんじゃ」はマツ科の「ハリモミ」であるというハリモミは、別にバラモミともいって、葉が針状できわめて鋭く、本邦針葉樹のなかでこれ以上鋭いものはないという。モミとはいうが実はトウヒ属に入るものである。日光以南九州に及んで分布し、富士山麓、山中湖畔には三〇ヘクタールにも及ぶ純林があって、それが国の天然記念物に指定されて有名になっている。本県にもあちこち針葉樹林中には見られるものであるが、こゝのは手近にみられる。大木の一本木ということであろう。また南安安曇村大野田の伊勢二ノ宮社の拝殿わきに「なんじゃもんじゃ」が一本ある。これと同種のものが、上田市塩尻のコクゾウ山の頂上近くにも一本ある。共にマメ科の「フジキ」であって、分布の北限として、かつて県の天然記念物の指定をうけたものである。フジキは、イヌエンジュによく似て「ヤマエンジュ」ともいわれている。奇数羽状複葉で葉の表につやがあって、小葉は互生しているのでそれとわかる。

(長野県文化財保護委員)

根もと目通幹囲三・五〇メートル(隣の杉の葉が写っている)

慶安の竿請（二）

巾具義

前号では慶安検地のアウトラインを述べたのであるが、ここでは北安曇地方に行われたこの検地の状況をできる限り具体的に見ていくことにしたい。とはいっても、慶安検地は三百年余の昔に遡ることであるために、具体的に検地の仕方までを明記した史料はどこにも見当らない。ただ幸い、その検地の結果の所産である「検地帳」なるものが、原本・写本の別はともかくとして、村のあちこちの旧家に保存されており、これをたよりに検地の実際をうかがうことにしよう。

検地帳は一か村に一冊ずつ存在するものである。今その例を大町市常盤区上一本木（旧上一本木村）にとり、市役所支所に所蔵される検地帳によって見ていこう。この表紙には信州安曇郡松川組上一本木村検地帳と表題され、「慶安三年寅ノ三月吉日」のごとく、その村に検地を施行したあとそれをまとめて一冊の帳面に仕立てた年暦が記されている。内容の末尾には、

不破善右衛門㊞
沢部与三右衛門㊞
芳賀次郎右衛門㊞
都筑与五右衛門㊞

と、この村の検地に当った四人の検地奉行が署名していて、この検地帳は松本藩より上一本木村庄屋にあてて交付されたものであることを証拠立てている。この帳が庄屋に交付されると、庄屋は保管書類中第一等の重要文書とするところから、その写本を作り、以後庄屋の仕事にはこの写本を使って原本の汚損防止をはかり、庄屋後の交替にあたってはこの原本を第一の引継ぎ書類としてきたものであった。ある村の庄屋のごときは、検地帳原本を紛失した為に、永年にわたる庄屋役を辞去しなくてはならなかった例もあるほどである

上一本木村検地帳の内容冒頭には

下原
下田六畝九歩　平右衛門分　助七
同
下田三畝拾五歩　同人分同　同
同
下田四畝拾弐歩　平右衛門

という様に、全村にわたって田畑一枚一枚を刻明に記載している。右の例についてみると「下田」というのは、田の中でも下の方の等級で、六畝九歩の面積を有するこの田は「下原」という地字の土地に所在し、耕作責任者は「平右衛門」という百姓の門（かど）百姓である「助七」になっていて、この人名を名請（なうけ）人と呼んでいる。田畑はその地味作柄によっていくつもの等級に分けられていた。すなわちその村における田の最上級のものを「上田（じょうでん）」とし以下「中田」「下田」「下々田」と四等級に分け、畑についても同様に分けている。この等級はそのまま課税率につながるものであって、検地帳の末尾の全村田畑の合計の個所には、課税率すなわち「斗代（とだい）」としてつぎのごとく記されている。

上田〆三町五反六歩　一石五斗代
分籾五拾弐石五斗三升
中田〆四町五反四畝拾六歩　一石三斗代
分籾五拾九石八升九合三勺
下田〆三町四反八畝弐拾九歩　一石一斗代
分籾三拾八石三斗八升六合三勺
下々田〆壱町弐反五畝弐拾六歩　九斗代
分籾拾壱石三斗弐升八合

以下同様にして「上畑九斗代」「中畑七斗代」「下畑五斗代」「下々畑一斗代」と記している。

ノビタキ

長沢修介

もうずっと昔のこと、小鳥の姿をカメラに収めるのに興味を持ち始めた頃の初秋、モズの高鳴きを写そうと重い五〇〇ミリの望遠レンズにアサヒフレックスをつけてモズを追い廻したが、カメラをすえてこれぞと思う時にすっと逃げられてしまい、すっかり疲れて田の畔にひっくり返って昼寝ときめこんでしまった。群って頭上を通るコカワラヒワや遠くのモズの高鳴きを聞きながらうつらうつらしているとすぐ近くの藪で小声で鳴いている鳥に気がつきあわててカメラに収めたのがこの写真であった。その時は写すのに夢中で何の鳥かも見分けず、それ以後この鳥に出合なかったのでついに不明のままになっていたが、つい先日やはり前と同じ場所でめぐり合ったチャ、チャ、と細く小さく鳴くのはノビタキの成長した一家族であった。

博物館ニュース

ご寄付ありがとうございました

桜井　一雄　大町市　古文書2点
首藤　豊　同　ククリ（山刀）1点
〃　〃　現金一四一〇円
松尾はる代　〃　〃　五〇〇円
平林　武夫　〃　遠山品右ヱ門写真1点
吉田仁治郎　〃　火かき棒　2個
堀田　清人　〃　現金五〇〇円
降旗　徳重　〃　木ねじ　1個
武田　武　松川村　ネパール民具　20点
横川　慶明　八坂村　化石　2点
松坂　悦夫　大町市　石がめ　1体
柴田藤三郎　大町市　山博用パンフ三000枚
渡辺　巌　〃　花壇（2坪）五千円相当
黒岩ブロック　〃　〃　（〃）五千円相当
鈴木　貞三　東京都　現金　五〇〇〇円
古原　和美　大町市　ネパール・チベット民具他　5点
金子　寿美　武蔵野市　現金　一一〇〇円
助弘　倫子　東京都　現金　一〇〇〇円
（順不同敬称略）

表紙説明

白馬岳より杓子岳白馬鑓岳
撮影　高橋秀男

山と博物館　第九巻　第九号
一九六四年九月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL（大町）二二一
大町山岳博物館
印刷所　大町市上仲町
信州印刷大町工場